

李賀詩における「龍」字について

薄井信治

A study of "Lung 龍" in the Poetry of Li Hè 李賀

Sinji USUI

一 はじめに

李賀（七九一―八一七）の詩に妖怪が多く出てくるのはよく知られている。数も多いが種類も豊富である。たとえば「龍」は60例、龍の一種である「蛟」は6例（うち蛟龍が2例）、亡霊を表わす「鬼」は10例ある。このような用字だけではなく、詩中の文脈によって妖怪と見なされるものがある。たとえば「放妾騎魚撇波去 妾を放ち魚に騎り波を撇つて去らしむ」（巻二 宮娃歌）の「魚」は普通サイズの魚とは考えられない。妖怪変化の類である。

李賀の詩を特徴づけるこれらの妖怪が詩中においてどのような役割を果たしているのかを探っていくことは無駄ではないだろう。李賀詩の発想の一端をつかめるのではなからうか。

本文では、用例の多い「龍」の字を取り上げ、分類した後、詩の発想との関わりについて述べてみたい。

二 想像上の動物としての龍

龍は神話や伝説にしばしば登場する想像上の動物である。李賀には神話や伝説を題材にした詩が多く、そこでは龍も神話的伝説的存在として扱われている。

- ① 啾啾赤帝騎龍來（巻一 河南府試十二月樂詞六月）——赤帝は夏を掌る神。
- ② 羲氏和氏迂龍轡（巻一 河南府試十二月樂詞閏月）——羲氏和氏は羲和を二つに分けて言ったもの。羲和は日輪の御者であり、龍にひかせている。

- ③ 呼龍耕煙種瑤草（巻一 天上謠）——前の句に「王子笙を吹いて鵝管長し」とある。王子は仙人の王子喬のことだから、龍を呼ぶのは仙人である。

- ④ 雌龍怨吟寒水光（巻一 帝子歌）——帝子は天帝の二女。

- ⑤ 閑取眞珠擲龍堂（巻一 帝子歌）——龍堂は河伯の住居。

- ⑥ 涼夜波間吟古龍（巻一 湘妃）——湘妃は水神。

- ⑦ 下置啣燭龍（巻三 苦畫短）——鍾山の神。

- ⑧ 吾將斬龍足（巻三 苦畫短）——燭龍の足。

- ⑨ 嚼龍肉（巻三 苦畫短）——燭龍の肉。

- ⑩ 不如却使青龍去（外集 神仙曲）——仙人のすまいに青龍を使いにする。

- ⑪ 鴻龍玉狗開天門（巻一 綠章封事）——道教の儀式を詠んだもの。鴻龍と玉狗は天門を守る獣である。

- ⑫ 曾入吳潭斬龍子（巻一 春坊正字劍子歌）——晋の周処の故事（伝説）を用いる。

- ⑬ 如今不參龍（巻二 馬詩二十三首其九）——龍をかいならした廳叔安の故事を用いる。

- ⑭ 座上眞人赤龍子（巻二 公莫舞歌）——赤龍子は漢の劉邦のこと。劉邦は母が龍と交わって生まれたという伝説がある。

⑮猶唱水中龍(卷三 王濬墓下作)——晋の王濬の童謡を踏まえたもの。

以上、神話・道教・伝説・伝承と関わる龍を挙げた。その他に、神話や伝説と直接の関係は見いだせないが、龍を実物として扱っているものがある。次章の「比喩」に入れてもよいが、より実在感が強いのでここで取り上げることとする。

⑯松溪黒水新龍卵(卷一 南園十三首其十二)——龍卵をトカゲの卵とする説

もあるが、取らない。

⑰老夫飢寒龍爲愁(卷二 老夫採玉歌)

⑱黄河冰合魚龍死(卷四 北中寒)

⑲烹龍炮鳳玉脂泣(卷四 將進酒)

三 比喩としての龍

龍はその特異な形態・神秘的な優れた能力・空を飛んだり水中に任んだりするという生態などによって、詩中ではさまざまな比喩に用いられている。

形態としては、皮膚の様子から樹木の外皮にたとえられ、全体の様子から松や峰などにたとえられる。

⑳龍皮相排曼(卷三 春歸昌谷)——前の句に「老柏 建霖の如し」とあり、龍皮が柏樹の外皮であることがわかる。

㉑老桐錯幹青龍愁(卷四 官不來題皇甫湜先輩廳)——桐の木肌。

㉒細束龍髻斂刀翦(卷四 五粒小松歌)——詩題から松を詠んだものとわかる。

松を龍にたとえるのは唐詩の常套だが、ここでは龍のひげだから松葉のことである。

㉓層岫廻峯復疊龍(卷四 谿晚涼)——かさなつた龍はかさなりあつた峰の形状を表わす。

㉔遶隄龍骨冷(卷一 同沈駙馬賦得御溝水)——溝水が白く長く横たわつてい

る形状(鈴木虎雄説)。

㉕骨出似飛龍(卷二 惱公)——瘦せた姿を言う。古楽府の「讀曲歌」に「飛龍は薬店に落つ 骨の出づるは只だ汝が為なり」とあるのを踏まえる。飛んできた龍は薬屋に落ちて骨を薬にされてしまうのである。

龍は優れた能力から、優れた人物や優れた器物の比喩に用いられている。

㉖往還誰是龍頭人(卷二 酒罷。張大徹索贈詩。時張初効落幕)——龍頭は第

一人者の代用語となつている。三国魏の華歆の故事を踏まえる。

㉗他日不羞蛇作龍(卷四 高軒過)——躍してえらいものになることを言う。

㉘君看母箭是龍材(卷二 昌谷北園新箭四首其二)——龍の如く優れた材器。

㉙西風未起悲龍梭(外集 有所思)——機織りの梭を美しく言つたもの。

㉚直犯龍顏請恩澤(卷二 致酒行)——龍顔は天子のかお。神秘的な象徴でもあり、代用語となつている。

馬を龍にたとえるのは常套的であるが、これも優れた能力を踏まえたものである。

㉛擲置黄金解龍馬(卷一 送沈亞之歌)——龍馬は駿馬のこと。ここではさらに優れた才能の人物にたとえる。

㉜龍脊貼連錢(卷二 馬詩二十三首其二)——龍馬の背骨。

㉝如今不羨龍(卷二 馬詩二十三首其九)——麗叔安の故事を踏まえる。

㉞走龍媒(卷四 瑤華樂)——龍媒は天馬すなわち駿馬を言う。

李賀の詩には吼えたり飛んだりする神秘的な劍が詠われることが多い。龍を劍の比喩に用いるのも、劍が持つ神秘的な能力を表わすためであろう。また、龍で劍をたとえるところには「道教における神劍思想の強い影響」²⁾も見うけられる。

㉟提攜玉龍爲君子(卷一 雁門太守行)——玉龍は劍に雕り付けられたものだが、ここでは劍の代用語となつている。

③⑤ 劍龍夜叫將軍間（卷四 呂將軍歌）

③⑥ 舞蛟龍（卷四 上之回）——前の句に「劍匣破」とあり、劍が匣を飛び出し
て舞う、すなわち劍の勢いをたとえていることがわかる。

龍の空を飛び、水に住むという生態から、花が空に舞うさまや冷水のゆらめきを
をたとえる。

③⑦ 花龍盤盤上紫雲（卷四 上雲樂）——龍のように空に上る花。

③⑧ 冰洞寒龍半匣水（外集補遺 靜女春曙曲）——龍のようにゆらめく冷水。

龍の鳴き声を笛の奏でる音楽の比喩に用いる。漢の馬融の「長笛賦」による。

③⑨ 吹龍笛（卷四 將進酒）——通説では龍の鳴くような調子の笛のこと。

④⑩ 湘江半夜龍起（外集 龍夜吟）——二句目に「高樓 夜靜かに横竹を吹く」
とある。横竹は横笛であり、以下六句にわたって笛の音の描写になっている。
この一句だけならば、「想像上の動物」に分類すべきだろう。

四 裝飾としての龍

龍の模様はもともと造形的で絵画や彫刻の題材として扱われやすく、また聖なるもの
のシンボルとして裝飾に多く用いられている。李賀の詩にも裝飾として画
かれたり彫られたりした龍が多く見える。

④① 龍頭瀉酒邀酒星（卷一 秦王飲酒）——龍の頭形で飾った酒の容器。

④② 盤龍蹙鏡鱗（卷二 馬詩二十三首其十四）——箱製の鏡。

④③ 鞍幹横龍篋（卷三 謝秀才有妾編練 改從于人 秀才引留之不得 後生感憶。
座人製詩嘲諷。賀復繼四首其四）——篋は鐘などを掛ける柱のことだが、
ここでは鞍の柄を掛けている。

④④ 龍帳着魑魅（卷三 昌谷詩）——龍を画いた幕。

④⑤ 烟霧濕畫龍（卷四 平城下）——旗に画かれた龍。

④⑥ 銅龍留環似爭力（卷四 榮華樂）——環は門の扉に付いている獸環。銅製の

龍は相争ってみえるように彫刻してある。

④⑦ 臺前鬪玉作蛟龍（卷四 梁臺古意）——臺の前面の裝飾。

④⑧ 帝家玉龍開九關（卷四 沙路曲）——天子の宮城の門上にある玉製の龍。

④⑨ 吹龍笛（卷四 將進酒）——通説は龍笛を龍の吟ずるような笛とする。次句
「擊鼉鼓」との対比から龍の模様を彫り付けた笛とも考えられる。

④⑩ 衰龍衣點荊卿血（外集 白虎行）——衰龍は卷龍で、この模様は天子の衣に
しか用いられない。

④⑪ 虬龍鱗下紅肢折（外集 崑崙使者）——柱や碑に彫刻された虬龍。

五 物名としての龍

「龍」の字が物の名の一部に用いられているもの。

⑤① 龍洲無木奴（卷二 感諷五首其一）——地名。

⑤② 黃龍就別鏡（卷三 送秦光祿北征）——城塞の名。

⑤③ 尋箭踏盧龍（卷三 追賦畫江潭苑四首其四）——山名。

⑤④ 龍陽恨有餘（卷三 釣魚詩）——人名。

⑤⑤ 龍門起斷烟（卷四 洛陽城外別皇甫湜）——峽の名。

⑤⑥ 草生龍坡下（外集 莫愁曲）——陂の名。

⑤⑦ 龍沙溼漢旗（外集 嘲雪）——地名。

⑤⑧ 鈿合碧寒龍腦凍（外集 春懷引）——香料の名。

⑤⑨ 龍腦入縷羅衫香（外集 嘲少年）——香料の名。

⑥⑩ 藥囊暫別龍鬚席（外集 聽穎師彈琴歌）——草の名。

六 詩の発想としての龍

龍は神話や伝説から生まれた想像上の動物であるから、神話や伝説を題材とし
主題とした詩に頻出するのは当然のことである。それらの龍は、赤帝・王母・仙
妾・秦妃・義和・湘妃・白石郎・秦娥・神君・太一・若木・靈書・上帝・仙人居

などの神仙を表わす語とともに神話的伝説的世界を描き出している。

しかし、李賀の龍に対する執着は、神話や伝説とは関係の薄い物の名に多く用いられることにかえって強く感じられる。詩の中で、李賀は無意識のうちに「龍」の字のついた物を選んでしまうのだろう。

このような事物や現象に龍を見いだす性向は、詩の中にある種の傾向として現われている。たとえば、「老柏」「老桐」などの年を経た樹木に李賀は龍を感じ取って、⑳「龍皮」㉑「青龍」と言う。また、李賀にとって水の中とは決して龍が潜んでいるものなのである。⑯「涼夜 波間 古龍吟ず」、⑮「猶ほ唱ふ 水中の龍」というふうには、水中で龍は鳴いている。④の龍は「湘江 半夜 龍驚き起」って、笛の音を表わす。⑰では「老夫 飢寒 龍為に愁ひ、藍溪の水気 清白無し」とあるように、藍溪の水中で龍は飢え寒える老夫のために愁える。⑱では寒さを描写して、「黄河 氷合して 魚龍死す」と水中の魚や龍の心配をしている。果ては⑳「水洞 寒龍 半匣の水」と匣の中の水にまで龍を見ている。また、㉒では「先輩の匣中 三尺の水、曾て吳潭に入りて龍子を斬る」とあるように、「三尺水」で剣をたとえ、その水からの連想で吳潭に潜む龍を導き出している。

このように水と龍との関係を見てくれば、⑯の「松溪 黒水 新龍卵」の「龍卵」はトカゲの卵ではなく、黒水から導き出された龍の卵でなくてはならず、④の「隄を遶りて龍骨冷たし」の「龍骨」は王埼などの言う砌の石よりも溝水の横たわる形状のたとえとする方がふさわしいと言える。

老木や水から龍が想起されるのと同じように龍から連想が働いて他の神仙や妖怪を導き出すことがある。神話的伝説的題材の詩ではあたりまえすぎるので、④「龍帳 魍魅を着く」の前後を引いてみよう。

- 47 待駕樓鸞老 駕を待つて 樓鸞老い
 48 故宮椒壁圯 故宮 椒壁圯る
 49 鴻瓏數鈴響 鴻瓏として 數鈴響き
 50 羈臣發涼思 羈臣 涼思 発す
 51 陰藤束朱鍵 陰藤 朱鍵を束ね
 52 龍帳着魍魅 龍帳 魍魅を着く
 53 碧錦帖花檉 碧錦 花檉を帖し

- 54 香衾事殘貴 香衾 殘貴に事ふ
 55 歌塵蠹木在 歌塵 蠹木在り
 56 舞綵長雲似 舞綵 長雲に似たり

(卷三 昌谷詩)

48 「故宮」は福昌宮のこと。李賀自身の注に「福昌宮は谷の東に在り」とある。引用した十句は福昌宮のことを述べた部分である。福昌宮は随の煬帝が建てたのを唐の顯慶二年(六五七年)に復興させたものであるが、「故宮 椒壁圯る」とあるところからすると、詩の作られたころにはまた打ち棄てられていたらしい。「陰藤 朱鍵を束ね、龍帳 魍魅を着く」も後の句同様に福昌宮の打ち棄てられ、荒廃した様子を表わしている。「陰藤」は日陰の藤、「朱鍵」は朱塗りの門関の錠、「龍帳」はすでに述べたように龍を画いた幕、「魍魅」は魍が山の精、魅が老物の精でどちらも妖怪のたぐいである。荒れ果てた古い宮殿の描写とはいえ、この妖怪の登場はあまりにも唐突である。この「魍魅」はやはり「龍帳」の龍から導き出されたものであろう。

「老夫採玉歌」(卷二)の龍は他の妖怪を導き出しはしないが、本来の主題とはそぐわない表現を生み出すきっかけとなっている。

老夫採玉歌

- 採玉採玉須水碧 玉を採る 玉を採る 水碧を須つ
 琢作步搖徒好色 琢きて步搖と作すも 徒だ好色のみ
 老夫飢寒龍爲愁 老夫 飢寒 龍為に愁ひ
 藍溪水氣無清白 藍溪の水気 清白無し
 夜雨岡頭食蕪子 夜雨 岡頭に 蕪子を食ふ
 杜鵑口血老夫淚 杜鵑の口血 老夫の涙
 藍溪之水厭生人 藍溪の水 生人に厭く
 身死千年恨溪水 身死して 千年 溪水を恨む
 斜山柏風雨如嘯 斜山の柏風 雨嘯くが如し
 泉脚挂繩青裊裊 泉脚 繩を挂く 青 裊裊

村寒白屋念嬌嬰 村寒く 白屋 嬌嬰を念ふ
古臺石磴懸腸草 古台の石磴 懸腸草

この詩は明らかに人民の苦役を諷刺する意図で作られたものである。「老夫」を詠むのは、少壯の者がすでに死に絶えていて、老人も労役から免れられないからだと姚文燮は言う⁴。老夫が辛い思いをして採った玉は「琢きて歩揺と作すも 徒だ好色のみ」とあるように髪飾りとなるだけである。これは暗に唐朝が玉を貴んだことを非難しているものである。貧しい老夫の「飢え寒え」て苦しい様子は「夜雨 岡頭に 藜子を食べ、杜鵑の口血 老夫の涙」で言い尽くされている。

では、それ以外の句ではどうであろうか。なるほど「藍溪の水 生人に厭く、身死して 千年 溪水を恨む」は玉を採る者たちの悲しい運命を詠んでいる。この「藍溪の水 生人に厭く」はおそらく班固『東都賦』の「原野は人の肉に厭き、川谷は人の血を流せり」を典故とする表現である⁵。『東都賦』では王莽の乱による大量の戦死者のことを誇張して表わしているが、李賀の詩では玉を採る工夫たちの多量の死を言う。「人之肉」は死体や死人のことである。「生人」は生民すなわち人民のことであると同時に生きている人のことでもある。「原野は人の肉に厭き、川谷は人の血を流せり」を一句にまとめ、死人を生きている人に置きかえたこの表現はいかに李賀らしいものとなっている。そして「身死して 千年 溪水を恨む」という李賀独特の嗜好を持った句が続く。「溪水を恨」み続けるのは明らかに死者である。亡霊のような存在である。諷刺の意図を持った詩句がいつべんに不気味なイメージのものとなり、諷刺の意味合いは薄れてくる。

最後の四句でも、なによりも強く心に残るのは怪奇で陰惨なイメージである。人がうそぶいているようにふりしきる雨、泉水のしたたる辺りに掛けられ揺れている縄、村の寒々とした情景、みすばらしいかやぶきの家。かわいらしい赤ん坊も見えてくれる人もなく、たった一人で泣いているかのように思われてくる。草の名の「懸腸草」でさえ「はらわたを懸ける」という不気味なイメージを内包している。これらの描写からは老夫の悲惨な生活よりも怪奇で陰惨なイメージが伝わってくる。

このように表現が諷刺から離れていったきっかけが「龍」にあると考える。美

玉の採取できる藍溪に龍に関する伝説は特にないので、この龍は李賀の想像であろう。呉正子は「龍も亦た為に愁ふ 況んや人に於いてをや」と言い⁷、抑揚表現のために龍を出したと考えているが、すでに述べたように、この龍は「藍溪の水」によって想起されたものである。そして、王琦が言うように⁸、老夫が玉を採るために水の中に入り、掻き回すことで、水中の龍も老夫の飢え寒えながらの騒ぎを愁え、身もだえして水を濁らせるのである。「無清白」も「水に入りて玉を取れば、水為に昏濁するなり」(呉正子)や「水混濁し、明らかに採り難きなり」(曾益)というふうに、玉を採る作業の困難さを表現したものとだけとるのではなく水中に実際にいる龍が攪拌することによって濁ってしまうと解釈する。そのように、「水」からの連想によって想像した龍を實體化させているからこそ、後の詩句の展開に關わって怪奇なイメージを引き寄せ、通常の諷刺詩とは似ても似つかぬものになったのである。

七 おわりに

李賀の詩は、一句ごとにつながりがないように見えるほどイメージに飛躍がある。それが李賀詩の難解さの理由の一つとなっているのだが、その独特の連想による想像の展開に慣れてくると、怪奇なイメージの連続が一種の必然性を持つことに気がつく。

「龍」の字をみていくと、ここにも李賀独自の想像の飛躍や屈折が現れていることが分かる。本稿では龍が何から発想されるか、そして何を導き出すかを明らかにした。このように李賀が好んで取り上げる神仙や妖怪を見直していけば、「全く常人とは異なる」¹¹と言われる発想法をさらに深く探ることができ、解釈不能扱いをされてきた詩句を解く手掛かりが得られるのではなからうか。

(注)

底本には王琦注『李長吉歌詩彙解』(世界書局)を使用した。

1 鈴木虎雄注釈『李長吉歌詩集 上』(岩波書店) 五十五頁。

2 森瀬壽三「李賀における道教的側面」(『日本中國學會報 第二十八集』)

- 3 王琦注には「龍骨。似指溝邊砌石」(『李長吉歌詩彙解』卷一)とある。
- 4 「少壯殆盡。耆耄不免。」(姚文燮注『昌谷詩集注』卷二)(世界書局)
- 5 班固『東都賦』(『文選』卷一)には「往者王莽逆。漢祚中缺。天人致誅。六合相滅。于時之亂。生人幾亡。鬼神泯絕。壑無完楛。郭罔遺室。原野厭人之肉。川谷流人之血。秦項之災。猶不克半。」とある。「原野厭人之肉。川谷流人之血」は楊雄の『法言』「淵騫卷第十一」によっている。
- 6 原田憲雄氏は、李賀は「水」と「死」の二つを同時に組合わすことが多く、それは単なる嗜好をこえるものであると指摘している。『李賀論考』(十二月樂辭)三百五十五頁。(朋友書店)
- 7 「忍飢寒而採玉。龍而爲愁。況於人乎。」(吳正子箋註『唐李長吉歌詩』卷二)(汲古書院)
- 8 「詩言玉產藍溪水中。因採玉而致藍溪亦不能安靜。不特役夫受飢寒之累。卽水中之龍亦愁其騷擾。至于溪水爲其翻攪。有渾濁而無清白矣。」
- 9 「無清白。言入水取玉。水爲昏濁也。」
- 10 「無清白。水混濁。明採難也。」(曾益注『李賀詩解』卷二)(世界書局)
- 11 鈴木虎雄『李長吉歌詩集 上』解説。二十九頁。

(平成元年九月二十日受理)

(宇部工業高等学校国語教室)